

令和5年度三重大学国際交流事業実施報告書（学内版）

1. 申請部局

学部・研究科名等： 教育学部

事業担当者の職・氏名： 教授・宮岡邦任

内線電話番号： 9221

電子メール： miyaoka@edu.mie-u.ac.jp

2. 事業の名称（20字以内，別に副題を付けても良い）

海外での教育実習を見据えた日本人学校での教育体験

3. 事業内容の別（該当するところにチェックを入れてください。）

教職員，学生の海外派遣（学会やシンポジウム等の出席は除く）

海外交流機関等からの教職員，学生の受け入れ

国際教育プログラムの開発や推進

その他

4. 事業の取組結果

(1) 事業概要（簡潔に事業全体の概要がわかるように記述してください）

本事業の最終的な着地点は、文科省が進める在外教育施設における海外教育実習の実施である。この目標に向け、当該年度の活動は、第一段階として学部がそのほかの海外大学で実施している海外教育実地研究に取り込み、グローバルな視点を持った教員養成プログラムの一部として位置づけることを考え、今年度はパイロット的な試みとして、日本人学校での体験実習、現地小中学校との交流を行った。対象は、マレーシア・ジョホール日本人学校とした。

本申請においては、そのような制度を構築することを念頭に、パイロット的な試みとして、日本人学校での体験実習、現地小中学校との交流を行う。

(2) 事業の背景・これまでの実績

外国につながる児童生徒数が我が国でも上位にランクされる三重県において、対象の児童生徒の対応は、教育現場においても喫緊の課題となっている。

三重県は全国的に見ても外国にルーツを持つ児童・生徒の在籍率が高い。教育学部での教員養成はこのような状況を鑑みて行う必要があり、それらの児童生徒がどのような風土・文化の中で育ってきたかを知ることは、教員として学校現場に立つ際に有益である。文部科学省が、海外での教育実習制度を新設したこともあり、その制度を活用することで、単に教育現場の視察等にとどまらず、日本の風土とは異なる環境下での実習による教育効果が期待でき、三重県という地域性を意識した教員養成に資する取組みとなると考える。

学部としては、すでに海外教育実地研究として二つの授業を設定している。この中で、台湾で実施している海外教育実地研究 B は、将来的には現地協定大学を介して現地の日本人学校において、本取り組みと同様の形を構築することを念頭に置いており、すでに授業を実施している状況にある。

(3) 事業実施結果

令和 5 年 9 月下旬に、ジョホール日本人学校を訪問し、本学部の目的を説明し、年度内の試行的な学生研修の実施を了解いただくとともに、次年度以降についても継続して海外インターンシップとして学生研修を受け入れていただく方向で調整を行った。

令和 6 年 2 月 13 日～23 日にかけて学部学生 3 名、引率教員 1 名で、試行的に実施した。研修内容は、日本人学校での授業参観、日本人学校教員との懇談、日本人学校での授業実施、現地小中学校の参観とし研修を行った（写真 1, 2）。

また、本研修の実施に際して、必要事項について覚書の取り交わしを行い、上記の学生研修実施期間中に学部長が現地に赴き、覚書の取り交わしを行った（写真 3）。

実施後、学生の教員採用へのモチベーションは確実に上がっており、参加学生の一人は、これも試行的に県教委との間で試行的に実施した公立小学校でのアシスタント研修にも参加するなど、将来に向けて積極的な活動を行える形で意識改革ができています。



写真1 事業実践の様子



写真2 現地学校の見学



写真3 覚書の取り交わし

(4) 事業の意義

文科省が示している在外教育施設を利用した海外教育実習の実施に対応する形で、本学部においても、第一段階として在外教育施設との連携が構築できたこと、試行的な学生研修の実施により、参加学生の意識の変わり方が確認できたことで、今後の単位化、教育実習の実施に向けて貴重な足がかりが気づけたことは大きな意義があると考えられる。

(5) 事業の発展性

上述したように、文科省の方針に沿った形で、将来の海外教育実習の実現に向け、現地日本人学校と引き続き連携を維持しながら構築していける足がかりができた。

(6) 中期目標・中期計画における位置づけ

第4期中期目標では「国や社会、それを取り巻く国際社会の変化に応じて、求められる人材を育成するため、柔軟かつ機動的に教育プログラムや教育研究組織の改編・整備を推進することにより、需要と供給のマッチングを図る」ことを掲げており、本取り組みはこの目標に準じて実施している。

中期計画についても、「社会や地域の本学へのニーズを踏まえ、本学の特色や強みを有効に発揮するための組織編制、適正規模を検討し、教育研究組織の見直し、再編等を推進する。特に教育学部の規模については、三重県の教員養成の拠点として適切な規模やカリキュラム等を構築するとともに、第5期以降に向けた教育学部のグランドデザインを取り纏める」としており、この中の社会や地域のニーズを踏まえる部分で、地域が抱える外国につながる児童生徒への対応ができる人材育成を目指した取り組みの一環として、本事業を位置づけている。

(7) その他

特になし

令和5年度三重大学国際交流事業実施報告書（一般公開：日本語版）

2月12日～23日の間在外教育施設（日本人学校）において3名の教育学部の学生が海外日本人学校でインターンシップ活動を体験しました。現在世界には49カ国に94の日本人学校と200以上の補習授業校があり、合わせて3万人以上の日本人の子どもたちが学んでいます。今年度初めての試みとして多民族国家であるマレーシアのジョホール日本人学校において、インターンシップ活動に参加しました。授業研究、行事参加、現地の学校訪問や隣国シンガポールでの自主研修など充実した日々を過ごし、国内の学校では出会うことのない経験を持った子どもたちとの出会いや多文化共生社会を肌で感じ、改めて日本という国を外から見ることができました。

最終日には学校長から修了証書をいただき、各学級でお別れ会もあり、子どもたちからは、涙を零しながらもっというほしい、また来てほしいと声をかけられ、学生たちもこみ上げてくるものを抑えきれない様子でお別れをしました。3名の学生達はこの経験を人生の宝として今後の教師生活の中で活かしてくれるものと確信しています。

令和5年度三重大学国際交流事業実施報告書（一般公開：英語版）

Three students from the Faculty of Education experienced internship activities at an overseas educational facility (Japanese school) from February 12th to 23rd. Currently, there are 94 Japanese schools and more than 200 supplementary schools in 49 countries around the world, where more than 30,000 Japanese children study. This year, for the first time, I participated in an internship at Johor Japanese School in Malaysia, a multi-ethnic country. They spent fulfilling days studying lessons, participating in events, visiting local schools, and doing independent training in neighboring Singapore, where they met children with experiences they would not have met at domestic schools and got a first-hand experience of a multicultural society. , I was able to see Japan again from the outside.

On the final day, we received a certificate of completion from the school principal, and there was a farewell party for each class. The students, with tears in their eyes, asked us to stay with them more and to come again. I couldn't help but say goodbye to him. I am confident that the three students will utilize this experience as a treasure in their future teaching careers.